

文部科学大臣祝辞

御紹介を戴きました、文部科学大臣を拝命しております末松信介です。隣の兵庫県出身です。

本日は大阪公立大学入学式・開学記念式典が盛大に挙行されましたことをまず心よりお喜び申し上げます。

大阪にとって、関西にとって、大きな歴史の始まりです。その式典にご案内頂き本当に光栄に思っております。

貴大学の前身であります大阪府立大学は、明治16年1883年に獣医学講習所として出発されました。大阪市立大学は明治13年1880年大阪商業講習所として出発されました。共に明治時代に創立され、その後幾多の変遷を経ながら、140年に亘り関西地域のみならず、我が国の教育研究をけん引してこられました。

そしてこれまでに例をみない規模の統合により、幅広い学門領域を擁する国公立大学の中でも、全国で有数の規模を誇る大学として、本日ここに開学される運びとなりました。

このたびの開学にあたりまして、大阪府吉村知事はじめ大阪府の皆様、大阪市松井市長はじめ大阪市の皆様、そして西澤良記理事長、辰巳砂昌弘学長をはじめ、関係者皆様のご苦勞やご努力に対して深く敬意を表する次第です。

まず公立大学として地方公共団体が設置、管理する大学という性格から、地域の知的そして文化的拠点として、地域の発展を大切にしなければならないと思います。そのことは、この大学の大きな使命ではないかと思っております。

さて私は昭和の生まれでございます。完璧な昭和人間です。

ご経歴を見ましたら、私と辰巳砂学長とは同い年です。どっちが老けているかということをお聞きしたいわけじゃないんです。私と同じ年生まれの有名人と言いましたら、サザンオールスターズの桑田佳祐さん、郷ひろみさんといった方々がおられます。(いまもなお)歌って踊って頑張っておられる二人を見ていると、もう少し私も(辰巳砂学長も)頑張っていこうと思っております。

ただ、昭和の時代というのは、昭和30年代、40年代、50年代中心に、社会にはいくつかの前提がありました。そして、その前提が今日、少しずつ崩れてきています。

1つの前提というのは、「明日は今日より必ず豊かである」ということでした。しかし今日、その前提は崩れています。

2つ目は、人生は比較的順調であり、「人生には突然の中断はない」という前提です。大体、「長寿と終身雇用」というのは予約可能でしたが、今、起業されたりして、終身雇用制度は崩れつつあります。また、長寿というのが保証されるものではないと私が実感したのが、阪神淡路大震災や東日本大震災、このたびの新型コロナウイルス。私は、突然の中断がある時代になったと思うのです。注意をしなくてはなりません。

そして三つ目は、第二の人生は負債なくスタートできるという前提がありました。大学を出て、就職をして、上手くいけば親から家までもらえる人が多かった。同居する方も多い時代でした。

しかし、今日若者は学ぶために借金をし、生活が苦しい学生が増えたと思います。子どもたちの相対的貧困率も高くなってきました。あの昭和の時代に比べましたら、国力が低下をしてきたことを認めなければなりません。

これからの時代は、まさに「予測できない時代」「用意されていない時代」「解答のない時代」です。これからの厳しい時代ですが、しっかり（これからの）日本を背負って立っていただきたいと思います。

最後になりますが私、昨年10月4日に文部科学大臣を拝命しました。その4日後に、ノーベル物理学賞を受賞された御歳90歳の真鍋淑郎先生とオンラインでお話する機会がございました。

真鍋先生は、人間の活動が地球環境に与える影響を最初に指摘をされた先生です。日本の研究環境について「これからもどんどん若い人に気候分野に入ってもらって、気候モデルの開発や豪雨の降り方などを研究してもらえたら」という話をされていました。

そして私が若い人たちに何か激励の一言をお願いしますと申し上げましたら、真鍋先生はこう仰いました。

「好きこそものの上手なれ」「必ずしもかっこよさや他人の見た目で職業を選ぶのではなく、自分が得意なこと、やっていて楽しくなることをやるべきです」と話されました。

私は素晴らしい言葉だと思います。人生の主役は自分です。やっていて楽しいことを私はやるべきだと思います。

本日第1期生として、入学される学生の皆さんが力強く歩まれることを心から祈念して、この大学の大きいなる発展を祈念して、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

令和4年4月11日
文部科学大臣 末松 信介